

# 闻 名 仁 教

第 183 号 毎月発行  
(発行日) 2025 年 12 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutsuji16@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
  - 〈念佛座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
  - 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
  - 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

五体ようやく衰え、寺に参るのもむつかしくなつてきましたが、家にあつても独りで念佛を喜んでおつたようあります。

昭和三十九年の一月、私が近所の檀家に参りましたところ、その家の主人が「嘉十郎さんも近頃は大分衰弱が加わり、たべ物を全く受けつけず、好きな酒ばかり飲んでいられるそุดだから、もう長くはあるまい」と申しますので、私も驚いて急速その足で嘉十郎さんの病床を訪ねたのでありました。

臼杵（大分県臼杵市）の片田舎に足立嘉十郎という同行がありました。この人は若い頃から聞法の志あつて、どこのお寺へも法座があると聞けば必ず参り、応分の志を捧げると言つた奇特な同行であります。

そこで私は「嘉十郎さん、ありがとうございます！こんどは死ぬのでない参らせてもらうのだから」と申しますと、彼が言われるには「ご院主さん！私は今から仏さまに取りまかれているようです。毎日世話してくれる婆さんも、嫁も仏様のように拝まれます。ことに近頃は食物がノドを通らぬので好きな酒ばかりを飲んでいますが、その酒のおいしいことは、

ところが、この人は日頃から地声が大きいので、その家に入ると大きな声で念佛しておられるから、この調子ならまだ大丈夫だろうと思つて、枕辺に行きましたところ、大層喜んで「ご院主さん！よう訪ねて下さいました。私には仏様がおいで下さったように思われます」と言つて合掌されるので、思わず私も合掌させられたのでありました。

す」と前置きをして「今まで何か用事があると、あの大好きな声で婆々」と呼んでいたのですが、この頃は、まことに気がやさしくなつて、お婆さん！と呼ぶようになり、子供や孫に対しても「○○さん」と呼び、「ありがとう、ありがとう」と喜ぶので、もう死期が近づいたのではないか？と案じております「云々」と。

全くお淨土で頂く百味の飲食かと思われるくらいです。そこで一升ビンを枕辺において、退屈すると一杯のんでは念佛を喜ばせていただいているります」と申されるので、私も彼の法悦に同調して念佛しておりましたところ、婆さんがそばに来て言われるには、「ご院主さん！爺さんは近頃ごろ人間が変わってきたようで、なんだか気持が悪いくらいで

も亡き父を祝福して、お父さんが好きであつた酒を飲もうではないか」と言つて、兄弟が喜びつつ酒を飲み交わしたということです。ちよつと聞くと非礼のようでもあります。が、念佛者の死は、こうした朗らかなものではないでしょうか。

ののち、遂に往生されたのでありました。葬式の晩には、子供達が集まつて言ふには、「お父さんはどう考へても死んだように思われない。あの死ぬときの様子というものが、何らの淋しさも見えず、ちようど子供が他所へお客様にでも行くときのような喜びようで死んで行かれたから、今頃はおるに違ひない。われわれ

この姿は前にもこの欄で

老妻を拌む  
佐々木蓮磨

紹介しました広瀬守  
一老師の晩年と全く  
軌を一つにしており  
ます。



服であり、親であり、祖先であります。そうした様な縁によつて生きているのですから、まさに私たちは「生かされているのです」。無数の縁とその働きとなつて働いているのちそのもの、それを一言でいえば寿命無量であり、阿弥陀如来であります。「阿弥陀如来のお働きで生かされているのです」。別に難しいことではなくて、実に当然なことですあり、そして有難いことなのです。それゆえ「之を尊び之を重んじ、以て如来の大恩を感謝せよ。」といわれるのです。

湧いてきます。

実は聖者でも凡夫でも、善人でも悪人でも、男でも女でも、親鸞でもヒットラーでも、いや人間だけでなく牛でも猫でも、生き物でも生き物でないものでも、それぞれの存在はその存在を存在たらしめている働き、つまり寿命無量のはかりない働きによって存在せしめられているのです。

現代の悪人の代表といわれるようなヒットラーでも寿命無量の阿弥陀仏の働きがなければ存在することはできません。その人の善悪・賢愚の性質や才能の有無に關係なく、大いなるいのちの働きにおいて生きているのです。ただそういういのちによって存在せしめられている、その上でその人が「どういう判断をし、どういう行動を選び、何を為すか」は一人一人の自由であり同時に責任です。善を為すか悪を為すか、正確な判断をするか誤った判断をするかという行いの責任は一人一人の責任です。その行い（身口意の業）によつ

て、その人の生活の在り方が変わり、それが集団になりますとそれぞれの国家の違いになり、世界の状態が変わります。自然環境が悪化するのもそこから起こります。

いのです。これを親鸞聖人は「摂取不捨の真理」といっています。

ただ問題は、この真理を見失い、私たちは自分自身を「個々別々で、私は私自身によつて存在している。あなたとは私は別物だ」というように個別的・孤立的に考え、いのちを「我が物」の如くに所有化しています。それが迷いの凡夫の有様です。そこから煩惱を起こし、罪を重ね、苦しみを重ねてきています。

このような姿を清沢師は「然るに、自分の中に足りを求めずして、外物を追い、他人に従い、以て己を充ちさんとす。転倒にあらずや。外物を追うは貪欲の源なり。他人に従うは瞋恚の源なり。」といつてゐるのです。

「自分の内に足るを求めず」というのは、自分の内とは、自分は阿弥陀仏によって生かされていて、阿弥陀仏を離れず、阿弥陀仏が自分のいのちの主であることしらなから、自分のいのちが空虚になり、人生の

全体に不足感が起ころうとしている。そうして何とか「もの足りよう」「満足したい」となるのですが、その満足を阿弥陀仏に求めなくて、外の方に求め出すのです。お金とか名譽とか権力とか、もちろんの娯楽とかに求める。それ自身の「内に足る」を求めて外物を追いかねばならないのです。また他人にしよようと、他者に過度に欲求する、それを「他人に従い」といわれるのです。このようにして「以て己を充たさん」としているのですから、そういう生き方を「転倒」した生き方だといわれるのです。今ここで既に与えられている阿弥陀仏と離れない「いのちの真実」を求めてなくて、それ以外のこの世の善きもの、楽しいもの、都合のいいもので己を充たそうとしているのを「転倒」といわれるのです。

るのです。そして他者への期待や欲求が大きくなると他者に「ああしてほしい」「こうなってほしい」と求めます。そうしますと他者は自分の期待や希望に必ずしも応じてくれません、いわば思い通りになりませんから、他者に対して「あの人は冷たい」「あいつは恩知らずだ」「彼は自己中だ」などと怒つたり非難したりで、人に對して「瞋恚（いかり）」が当然起ころうとしてくるのです。

## 信 心 夜 話

哲学者の西田幾太郎博士の有名な歌に

我心深き底あり  
喜も憂の波も

とどかじと思ふ

というのがある。この歌は博士が50才ごろの歌で、非常に苦難の多かった時期の歌である。息子さんが死に、奥さんが重い病で倒れ、娘さんが病気になるといういわゆる不幸が重なった時に満足を求める充実を求める歌である。

ここで自分が人生に本当に満足を求める充実を求めるなら、それを如来に先ず求めよとお勧めくださるのである。しかもその如来は今個々の人にちゃんとすでに与えられているのです。ただそれを知らないだけなのです。それを言葉によつて知らせ気づかせてくださる働きが「南無阿弥陀仏」の言葉であり仰せでありお念佛なのです。

（如來の働きの「働き」は「用

き」という言葉がふさわしいのですが、読みずらいので「働き」になりました）

態ではあっても「深き底あり」といわれている。この悲喜苦樂の届かない「底がある」ということ、これを知させていただく。念佛生活といつてもそれだけであるともいえる。これだけであるが、不安や憂いの煩惱の波はいかほど起これども、

「ここからは絶対に落ちない大地」いわゆる摂取不捨のいのちの大地があること

をお念佛はそのつど知らせ

てくれる。このお知らせ

の念佛が道であり、光であ

り、救いである。正信偈に

「不斷煩惱得涅槃」という

一句があるが、この解釈に

は、この世で煩惱はありな

がら、煩惱のまま救われて、

死して淨土に生まれて涅槃

を得るという解釈もある。

それも有難いが、今この世

の、煩惱だらけの日々の生

活の中で、悲喜苦樂の煩惱

があるまで、我が身に離れず、私の底で私をつかみ、

私を引き受け、一瞬一瞬運

んでくださつておられる大いな

悲のいのちましますことを、この一句は告げてい

この十一月にHさん母子が東本願寺の「おみがき奉仕団に」参加されました。一泊二日本山に泊まりがけで過ごし、朝は御影堂での勤行、同朋会館での法話座談、そしてメインの仏具のおみがき奉仕をされました。本山の仏具は非常に大きく、しかも沢山有りますのでそれを磨くことは大変ですが、全国から沢山のご門徒が参り、救いである。正信偈に

初めての方にはとても感動的な出来事だと思います。毎年、こうした奉仕団参加の募集がありますので、これはだれでも、一人でも参加できます。ご希望のある方はおっしゃつてください。

現在の東本願寺（真宗大

谷派本山）の御門首（住職）は大谷暢（ちようゆう）裕門首です。ブラ

ジルの縁が深いお方で、英語の外にポルトガル語も話

せる工学にも詳しいお方で、仕（参列）されて皆様と一緒に勤行をなさいます。

なお跡継ぎの新門様は門首のご子息の大谷裕師です。

（了）

二月の御すす払い奉仕団にも参加したい」と希望されました。私などは何度も本山には泊まりがけで行きまして、それほど感銘す

ました。私には勤行をなさいます。

なお跡継ぎの新門様は門首のご子息の大谷裕師です。

（了）

## ▲念佛寺報恩講▲

十一月十一日（月）午後二時始

講師 滋賀県 瓜生崇先生

\*なお同日十一月十一日は午前十時より勤行・法話（念佛寺住職）があります。ご自由にお参りください。

（了）